

---

「大阪・関西万博に向けて  
～機運醸成 京都ラウンドテーブル」

開催報告

---

一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 事務局作成

## 「大阪・関西万博に向けて～機運醸成 京都ラウンドテーブル」 開催報告

「大阪・関西万博に向けて～機運醸成 京都ラウンドテーブル」を、2022年11月30日(水)、世界文化遺産 京都醍醐寺にて開催した。科学や技術に加え、歴史・文化・芸術の聖地京都に、大阪・関西万博プロデューサー6名がリアルに集まり、各プロデューサーが進めている大阪・関西万博の取り組みについて語っていただいた。また、2022年12月15日(木)からしばらくの期間、オンラインにて配信し、多くの方に視聴いただいた。

### I ご来賓のご挨拶

#### ◆ 山下 晃正氏 京都府副知事

大阪・関西万博のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」であるが、「いのち」について、京都には春と秋に多くの方がお越しになる。春はいのちの息吹を感じ、秋はいのちの儚さを感じるために来られるのではないだろうか。また、「未来社会のデザイン」について、未来は過去から継承の上に成り立っており、京都で本日のような取組をしていただくことには意義がある。京都府、市、経済界、文化界を挙げて、関西パビリオンに出展する。関西パビリオンは京都のゲートウェイとなるが、できれば京都に来ていただき、未来社会について考えたり、議論いただける場になればと思う。今日はその第1回目のイベントだと思っている。これから実りある万博になるようにご支援いただき、我々の事業についてもご指導いただきたい。



#### ◇ 門川 大作氏 京都市長

醍醐寺さんは、1000年を超えて人々の幸せと世の平和のために祈り続け、歴史を感じ、未来を創造することで、いのちと向き合ってきたお寺である。今日は、京都で機運醸成をと、6人のプロデューサー、各界のリーダーにお越しいただいた。京都も万博に向け、経済界が一生懸命取り組んでおられる。府市協調、オール京都で京都ならではの取組をしていきたい。コロナ禍により、さまざまな社会課題が顕在化した。万博では、CO2ゼロ、ごみゼロ、食品ロスゼロなどの社会課題に真正面から取り組んでいただく。これは京都議定書誕生の地として心強い。去年はウクライナ、キウ市と姉妹都市50周年であった。京都は市民ぐるみで支援活動を行っている。一日も早い平和の回復を願いながら、共々行動していきたい。そのようなことも含めた大阪・関西万博であろうと思う。



◇ 堺井 啓公氏 公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 機運醸成局長

ここにいる方々は、2025年大阪・関西万博で、色々なかたちの希望、将来を見据えながら、どのような万博にしていくかを考えて下さる方々だと思う。大阪・関西万博において、京都は世界から注目される街である。後援の京都支援協議会という会が立ち上がっており、万博に対して、貢献しようと考えて下さっていることを感じている。万博のプロデューサー6名が揃うことはそうあることではない。万博を支えているプロデューサーの話を聞いていただいて、万博を素晴らしいものにしていきたいと考えていることを皆様にも感じていただきたい。今日は、万博まで850日という頃。いのちを取り上げ、未来社会を見ていくというテーマであり、コロナ感染症で分断されたものを、また一つにしてゆく。そのような思いを一緒に考えていきたい。



後援の京都支援協議会という会が立ち上がっており、万博に対して、貢献しようと考えて下さっていることを感じている。万博のプロデューサー6名が揃うことはそうあることではない。万博を支えているプロデューサーの話を聞いていただいて、万博を素晴らしいものにしていきたいと考えていることを皆様にも感じていただきたい。今日は、万博まで850日という頃。いのちを取り上げ、未来社会を見ていくというテーマであり、コロナ感染症で分断されたものを、また一つにしてゆく。そのような思いを一緒に考えていきたい。

II (公社)2025年日本国際博覧会協会 プロデューサー6名のスピーチ

<登壇者>

- ◇ 藤本 壮介氏 会場デザインプロデューサー
- ◇ 石川 勝氏 会場運営プロデューサー
- ◇ 石黒 浩氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 中島 さち子氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 落合 陽一氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 宮田 裕章氏 テーマ事業プロデューサー



◇ 藤本 壮介氏 会場デザインプロデューサー

万博会場に大きな丸いリング状の大屋根を造る。大屋根は来場者の主要な動線になる。来場者を雨や日差しから守り、さらに分かりやすく迷わないようにと考えている。大屋根で囲まれた丸い部分に各国のパビ

リオンが全て入っている。多様性の時代、どんな国のどんな年齢の人も、直感的に繋がっていると感じてもらえるように丸を描いている。その中に世界が入っているというイメージである。大屋根の上にも登る



ことができる。縁が立ち上がっており、空が丸く切り取られた形になる。皆で見上げて、世界は繋がっており、一つの空の下にあるという感覚を感じてもらいたい。大屋根は1周約2km、高さは低いところで12m、高いところで22mである。それを木造で造ろうと思っている。木造には1000年以上の歴史があり、木を使うことで循環を未来に繋げていく。日本の伝統の木造建築にインスピレーションを得て、組み方も伝統建築に習った組み方にし、世界を驚かせる場所にしたいと思っている。ぜひ、楽しみにしていただき、機運も醸成していただき、2025年大阪・関西万博を迎えたい。

#### ◇ 石川 勝氏 会場運営プロデューサー

参加企業は準備が整い次第、順次発表してくタイミングを迎えている。2023年には会場建設も始まり、前売り入場券も発売される。いよいよ一般の方に向け、多くの方に万博の素晴らしさを発信していく時期に来た。愛知万博の総合プロデューサーの木村尚三郎氏が「振り返れば未来」という言葉をよく言っていた。万博を行う上で、過去はどうだったのかということを考えるのは重要なことである。1851年ロンドン万博が1回目である。当時はビクトリア王朝の時代。自国の産業力を披露し、植民地から珍しいものを持って来て、見せ合いするものが万博であった。



かつては到達点を披露するものだったが、今は地球的課題を考える出発点になっている。1970年大阪万博は日本中に大きなインパクトを与えた。今の多くのリーダーにとっては、子供の頃に行って刺激を受けられたという経験があると思う。1970年大阪万博は、大衆の関心に合わせた万博であった。今は価値観が多様化しているので、多様性を強く意識して進めている。直近の万博としては、愛知万博があったが20年前のことである。たかが20年だが大きな違いがある。そのころはスマートフォンがなかった。今はスマートフォンの無い生活ができない時代。デジタルが生活に大きく関わっている。愛知万博の頃は環境問題がテーマで、テクノロジーで解決するという展示が沢山されていた。大阪・関西万博はいのちの課題を解決するテクノロジーが多く展示される。運営も最新のテクノロジーを導入することで万博自体を高度化すること考えて設計している。ドバイ万博は非常に良い万博であり、新しい取り組みを成功させた。万博は半年間、世界中の国々が同じ場所で同じ時を一緒に過ごす。半年間の中で国と国、国と企業が課題についての意見交換をしたり、ビジネスマッチングをしたりしていた。このレガシーを引き継いで、さらに発展させ、次の万博に繋げていきたい。皆さんのお力を借りて万博を成功させたいと思う。

#### ◇ 石黒 浩氏 テーマ事業プロデューサー

50年前の大阪万博では色々な科学技術が展示され、皆が同じ方向を向いて活動していたという時代であり、

日本もそれに追いつけ追い越せという万博であった。人間が豊かになるということばかりを考えており、人間が未来においてどう進化するか、生態系をどう守るかということは考えられていなかった。50年経ち、人間は遺伝子を組み替える技術を手に入れた。人間そのもののデザインができるようになったのである。生態系も壊そうと思えば壊せるし、守ろうと思えば守ることができる。人間が動物と違うのは、技術によって進化をしているということ。自らが人そのものをデザインし、社会、環境もデザインしていく。そのような新しい社会になっていくと思う。自分で未来を創ると言っても、どう創って良いか分からない。そのイメージを皆さんと共有するのが万博の大きな役割だと思う。私のパビリオンではその具体例をお見せし、そこで色々な議論が巻き起これば良いと思っている。特徴としては、様々な業種の協賛企業があるので、それぞれの業種において、学校、病院、高齢者施設など50年後どんな形になるのか、どんな形にしないといけないのかということ議論して展示をしていきたい。人間は色々なものにいのちを感じてきた。縄文時代だったら道具だし、そのあと埴輪になり、仏像になり、文楽や能にもいのちを見出し、深い文化



の中で積み重ねられて来た。未来の風景はガラスや鉄でできた、我々が小さい頃に創造した風景ではなく、もっと文化が色濃くなる風景だと思う。これまでは多くの人を養うために、効率よく家を造り、ものを作ってきた。これからは自分たちが積み上げたものを更に深く積み上げていくこと、日本の豊かな文化を育むことが目指すところだと思う。科学技術があればもっと文化を深くできる。多様性の中で、より深い文化に支えられた、未来を展示して、皆さんと共有したいと思っている。

#### ◇ 中島 さち子氏 テーマ事業プロデューサー

事前から事後に繋がる大きなうねりの中に万博が立ち上がるということが必要だと思う。事前として、すでに活動が始まっている。先日、花園万博でもワークショップをさせていただき、市民の皆様、子供、高齢の方にご参加いただいた。音楽、数学、steAm教育をしているが、今はテクノロジーなど、強いものに未来を見せてもらっている。これからは、一人ひとりが持っている創造性を活かし、未来を創る21世紀になると思う。その象徴が2025年大阪・関西万博だと思う。今、弱い立場である人にも光が当たる。そして、その人たちの創造性が開き、生きる喜びを与えていけるような社会の象徴にしたい。その中で作る喜び、繋がる喜び、生きる喜びを表現する。テーマ事業は「いのちを高める」である。必ずしもパビリオンを造ることだけでなく、遊び、学び、芸術、スポーツを通じていのちを高め、協奏の社会を創ることである。本日は時間が足りないので説明ができないが、パビリオンの名前は「いのちの遊び場クラゲ館」といい、クラゲをテーマにしている。クラゲをテーマにした理由として一つ言えるのは、ゆらぎのある遊びである。決められたものというよりは、自分の中で生まれてくるようなものを大切にしたい。また、少しでも皆さんに作り手として参加してもらいたいと思っている。ワークショップや発明ゾーンを設けて、事前のイベントやバーチャルを通じて皆さんに参加してもらいたいと思っている。私たちは0~120歳を子供たちと定義している。インクルーシブの観点で、車椅子の方、見えない方、聞こえない方もインクルーシブ会を開いて、おもてなし側に回っていただくにはどうしたら良いかということも考えている。海外の方が一同に会する機会がめったにない。海外と繋がるということも2025年を待たずしてやりたいと思っている。私自身、お茶の世界にはまり始めている。裏千家の方々と一緒に企画して、子どもたちと茶室を造るという



取り組みをしている。お茶を体験し、体験を通じて本質や心を知る。その中で、日本文化は奥が深いと感じている。海外にも色々な文化、民族音楽、舞踏などがあり、それを使って何かできないか考えている。万博は6か月で終わるが、そのあとに繋がっていくものにしたい。

#### ◇ 宮田 裕章氏 テーマ事業プロデューサー

担当テーマは「いのちを響き合わせる」である。プロデューサーだけでなく、参画する企業、自治体、色々な人と繋がりながら共鳴して作っていききたい。経済合理性の中で、お金より大切なものがあると分かっているけど、それを共有することが難しかった。それが変わらなくてはいけない時代になった。平和であり、健康であり、環境、人権などいのちをめぐる多様な軸があり、世界が変わり始めている。その背景にあるものは何かというと、デジタルを始めとした一連の技術革新である。情報革命の本質は繋がりにある。



繋がりが可視化される中で、ある製品を使う上で 詐取の上に成り立っていれば、どんなに良いものでも許されない。どういう影響を世界に与えるのかを見ることで、我々はビジネスの在り方、世界の在り方を再定義しなくてはならない。食料や化石エネルギーは使うと無くなる。今までは、排他的に所有し、奪い合い、そして競争するのが社会、経済であった。これから駆動してく大きな力であるデータというものは、共に使うことができる。ある種の理想論であったが、社会を回す大きな力になる。この転換点において万博がどうあるべきか考えていくことが重要だと思う。大屋根のリングは多様な中で繋がりを表現している。そして、リングの象徴として森を置いた。群体として多様な生命と共鳴し合っているのが森である。象徴的な森において世界の多様な未来を考えていきたい。具体的に何をするかというと、京都に本拠地を置かれている村田製作所さんと連携したセンサーである。大量消費大量生産の中で、人は平均化され、平均像の歯車に当てはめられてきた、データを使うことでコストを大きく掛けることなく、多様性に寄り添うことができる森を歩くとき、疲れている人はどう歩くと豊かになれるのか。子供の目線で楽しく森を散策するならどういう体験ができるのかなど、データを使いながらなら響き合わせる。森を歩くということが未来のコミュニティの中で生きるということ、その先の未来に繋がるということ、万博までに模索し、万博で実証していききたいと思う。私のバイブルの一つが枕草子である。1000年前のものであるが、清少納言がとらえた一瞬の美しさは普遍的なものである。京都は日本の花鳥風月、歴史、多様な美しさの中で文化を育てている。その普遍的なものをパビリオンの中に作っていききたいと考えている。

#### ◇ 落合 陽一氏 テーマ事業プロデューサー

私は「いのちを磨く」がテーマである。輝くと磨くは非常に近いものだと思う。デジタルネイチャー、新しい自然というものがコンピューター以後どうやって生まれていくのかと考えており。サンテグジュペリの言葉のように、波に磨かれた小石のように自然な形になったら、人間が認識しないようなものとして技術を受け入れ、馴染んでいくものだと思う。磨かれてできるものとは、日本では何だろうと考えたときに鏡かなと思う。昔からご神体を鏡にしたり、あらゆる宗教は鏡を大切にしてきた。今の時代で鏡とは何だろうと考えてときに、挑戦が可能なものがデジタルヒューマンだと考える。「マイナンバーや人間ドックのデータを個人で持ち歩くようにしましょう」というデジタルヒューマンの利活用の検討が進んでいる。人

間のデジタルな身体とは最終的にどんな形になっているのか、それは想像しにくいものである。今はデジタル空間に写し鏡である自分自身すら持っていない。デジタルの向こうに身体があれば社会的に重要な役割を持つと思う。2020年に立てた2025年にできるギリギリの目標としては、リアルタイムに自分と同じ写し鏡が動き、自分と違うように動くが、自分の声で話すというようなものの実現である。人類ができるギリギリのところまで作って出すと決めている。そして、建築空間のデザインがもう一つの鏡となる。伸びたり縮んだりする鏡でできているものを考えている。なかなかイメージしにくいと思うので「落合陽一パビリオン」で検索して見てほしい。動画にぬるぬると動くパビリオンがある。本当に光がぬるぬる動くことを感じていただける。動画やCG、スマホを活用し、いのちを磨き、輝き、自分の身体が新しくなるような体験を感じてもらいたい。私のパビリオンには物理的な展示物はなく、ほぼデジタルを見ていただく。デジタルと身体が向かい合った先にどんな風景があるのかを考えていきたい。



### Ⅲ ラウンドテーブル

#### <登壇者>

- ◇ 藤本 壮介氏 会場デザインプロデューサー
- ◇ 石川 勝氏 会場運営プロデューサー
- ◇ 石黒 浩氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 中島 さち子氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 落合 陽一氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 宮田 裕章氏 テーマ事業プロデューサー

#### <モデレーター>

- ◇ 高橋 朋幸氏 (株)三菱総合研究所 執行役員 営業本部長  
(一社)夢洲新産業・都市創造機構 幹事会員



**高橋氏**：プロデューサーの皆様順番に質問をさせていただく。まず、藤本先生への質問である。大阪・関西万博に向けて、京都のポテンシャルをどう生かしていけばよいか。すでに京都で活動されていると思うが、どう深めようと考えているか。お考えをお聞かせいただきたい。

**藤本氏**：会場デザインという意味では大屋根のリングを木造で造るということは最初から考えていた。ヨーロッパでは超高層を木造で建てているが、日本は少し遅れている。万博を機に大規模な木造建築を建て、伝統をしっかり受け継いだ、世界が驚く伝統建築にしたい。マスタープランを描いた当初は、水面下で調整してきた。木材も調達できる目途がついた。木材の循環だけでなく、伝統の循環も必要だと考える。中心にある森についてはもっと長いスパンの循環となる。森を中心に置くことで、歴史と知恵の継承に繋がると考える。



**高橋氏**：石川先生にお尋ねする。4つの時間軸という話があった。BtoCのフェーズに入るという話もあった。このあたりで京都と万博についてヒントをいただきたい。

**石川氏**：万博のレガシーとは「人」を創るということに尽きると思う。歴史のある京都で実践していきたいと考え、醍醐寺様に協力いただき、次世代のリーダーになる若い人に、それを体験する場を作った。若い人たちは、新しいことを生み出すということに強い意識を持っているなど思ったが、それを実現してく



というところが難しいのである。万博とは新しいことへの挑戦が沢山ある。その機会を一人でも多くの方に体験してほしい。昔、お寺にはそのような役割があったということを知り、弘法大師や秀吉公もその時代のイノベーターであり、世の中を変えたいというマインドをもって、事業企画をして実行し、時代を変えてきた人物だと思う。長い歴史の中で学ぶものが京都には沢山ある。万博を創ることと、日本の歴史の中で生まれたことには繋がりがあがる。であるので、京都を紐づけて取り組んでいきたいと考えている。

**高橋氏**：石川先生が発案で開催された次世代リーダー育成講座は、落合先生、石黒先生に講師として参加いただいた。また、お席にいらっしゃる奥山様、堤様にも講師をしていただいた。万博を契機に人創りというのは大きなテーマだと思う。

石黒先生にお尋ねする。すでに京都で活躍されているので、メッセージをいただきたいのと、京都芸術センターで平田オリザ氏とアンドロイド演劇をされた、今後、このようなことはしないのか教えてほしい。





石黒氏：けいはんなに通って30年経つ。パビリオンにはアンドロイドをたくさん置く。キックという場所に拠点を置いて準備を進めており、パビリオンの準備は全て京都で進めることになる。パビリオンの特徴はアバター。CGのエージェントである。コロナの次の感染症が流行るかもしれないし、コロナで厳しい状況になるかもしれない。その中で万博を開催しなくてははいけない。アバターは世界のどこでも働くことができる。多くの方にアバターを体験してもらって、万博に参加できるようにしたい。万博の前には地元の方とも交流できる場作りしたいし、メディアの方にも少し見てもらう機会を作りたいと考えている。一番大切なのは文化である。日本の歴史の中で、どんなものにいのちを宿してきたのか。仏像も重要な文化の一つである。京都府様、京都市様にも協力いただいて展示したいと考えている。アンドロイド演劇もやりたいが、まずはパビリオンを作ることに集中している。パビリオンの展示は未来を見ていただくために短い演劇のようなものになる。平田オリザ氏とやってきたようなノウハウが反映されると思う。また、長い未来のシーンもあると思うので、演劇などで表現することも考えていきたい。



高橋氏：中島先生にお尋ねする。いのちが高まる茶室という話があったが、京都でやってみたいことを教えていただきたい。

中島氏：改めて日本文化は面白いと感じる。良いものを体験して、作ることを通して学ばせていただいている。1月に京都 steAm をロームシアターで開催した。東大阪でも行ったが、お茶室と使わせていただき、寝たきりでお茶室に入ったことのない人も入れたり、ガムテープで茶室を作ったりした。作るということを通したプロジェクトを大きくしたいと考えている。そして、テクノロジーを交えることにもトライし、キーを触ることで音が聞こえるとか、木漏れ日を表現できたりということに挑戦した。工作するということで何か新しい文化が作れないかと思っている。利休、秀吉、売茶翁の話も面白い、一見、雅な世界だが、色んな人々に開かれているのは思想変革であると思う。そういうものを21世紀にやりたい。教育、ジェンダーについても京都の皆様と話を進めている。京都に限らず、一緒に考えていきたいと思う。一般社団法人 steAm BAND を設立し、学びの協奏コンテストを行っている。小学校以下、中学生、高校生、シニア枠があり、インクルーシブ特典もある。アート作品でも社会課題解決でも、研究でも何でも良いが作品をだしていただく。参加者は本当に茶室を造っている方、バレリーナやエンジニアといった専門家と15分話せるという機会を設けている。



高橋氏：宮田先生にお尋ねする。京都の情報発信についてどう万博と絡めていくか、お考えをお聞かせいただきたい。

宮田氏：新しい大学を作ろうとしている。藤本さんにデザインしてもらっているが、地域から未来を創る。アンチ都市ではなく、大阪も東京も地域である。飛騨に拠点を作り、サテライトを京都に設置したい。学びそのものが今の実態と大きくかけ離れている。受験勉強は子供をスタンドアローンな状況にし、与えられた知識をストックし、いかに正解を答えるかというものである。中国はそのような受験戦争を廃止した。多様な人と繋がりながら未来を創るという能力が必要である。これを共創学としているが、人と人、人と世界をどう結ぶかということを考えていく。コンテンポラリーアートの定義も社会の形を創造することだと言われている。モナリザはレオナルドダヴィンチの傑作である。彼の作ってきた多様な医学や軍事、知識はモナリザを描くことで集約していると言われている。モナリザを通して何が言いたかったのか、モナリザは決して美しい人ではない。しかし、一人の女性がほほ笑むことで鑑賞行為が成立する。人類にとって、500年前、1000年先の普遍的なものは何か。人と人の肯定的な感情を結びながら、これが文化、文明の礎になっていく。ほほ笑みの行為の中に普遍を表現したのではないかと思う。万博を通して、京都の多様な文化や美意識の中で紡がれてきたものから考えていければと思う。お茶であれば、千利休の時代。能



であれば世阿弥の時代。それは戦国時代であった。争っていた人が価値観を超えて対話するとはどういうことなのか。死と隣り合わせの時代であり、いのちと向き合うということは何なのか。日本だけでなく、世界がその転換点であり、様々な価値観の中で未来とどう向き合うのか、個とどう向き合うのか、この本質に京都の育んできた文化というものが大事だと思う。この問いを考えていく中で未来を創ることができればと思う。まだ、私自身が未熟なので、教えていただきながら共に考えていきたい。

高橋氏：落合先生は昨年、醍醐寺でエキシビションをされた。万博に向けて、地域とやってみたいことをお聞かせいただきたい。

落合氏：先ほど、仁王像を借りたいという話をした。借りている間はデジタルパネルを貼って、光る仁王像を表現したいと思う。デジタルで撮りたいものも沢山ある。私たちのパビリオンは質量がなく、パネルさえ置けばどこでもできる。ぬるぬる光る映像を見ているうちに大阪に繋がっているようなものを到る所に作りたいと考えている。富士吉田市の芸術祭では能舞台上に3m強の光るLEDパネルを置いたが、お堂から燃えるような光が漏れているので、近隣住民が集まり「綺麗だね」と言っていた。会場まで足を運ばなくても良いこともある。そのようなことを、機運醸成も含め来年から行いたい。



#### IV 閉会の挨拶

##### ◇ 壁瀬有雅大僧正 世界文化遺産 京都 醍醐寺執行長

すごいお話を聞かせていただいた。仁王像はぜひお持ちいただきたいと思う。角川市長様、山下副知事様、

堺井局長様、プロデューサーの皆様、一堂に会し、これを醍醐寺で開催できたことを光榮に思っている。座主は大阪で万博が開催されると決まる以前から。万博には大変興味を持っていた。京都の文化、芸術の根底には宗教、仏教があると語っている。50年前の万博は学生であったが、何度も足を運んだ。ワクワク感と未来への希望を持ったことを覚えている。今回も、若い方にとって未来を感じる機会になればと思う。



◇ 井垣 貴子 (一社) 夢洲新産業・都市創造機構 代表理事

京都府様、京都市様、「大阪・関西万博」京都支援協議会様、2025年日本国際博覧会協会様、関西経済同友会様のご後援を賜り、世界文化遺産京都醍醐寺様の特別協力の下、大阪・関西万博プロデューサーの藤本壮介先生、石川勝先生、石黒浩先生、中島さち子先生、落合陽一先生、宮田裕章先生の6名様にリアルにご登壇戴き、最新の情報を含めお話し戴き、これまでに例のないラウンドテーブル形式のフォーラムが開催できたことを、厚く御礼申し上げます。また、京都府山下副知事様、京都市門川市長様、2025日本国際博覧会協会堺井機運醸成局長様、醍醐寺壁瀨総長様にご臨席賜り、また経済界はじめ自治体や大学を代表する方々にご参席戴き、深く感謝申し上げます。仁王門を万博会場に持って行く話に総長様が「いいですよ」と言ってくれました。醍醐寺様がすごいと思うのは、上醍醐と下醍醐の約200万坪の広大な敷地に、京都府内で最古の木造建築の五重塔など国宝75,537点(日本一の国宝点数)をはじめ、仏像、文書、絵画など古代、中世以来の約15万点にも及ぶ貴重な寺宝を守り続けている。そして、「活かされてこそ国宝」というイノベティブな考えをお持ちである。文化庁が京都に移転し、文化芸術首都とも言える京都から、夢洲新産業・都市創造機構は、本企画をキックオフに、大阪・関西万博に向けて、SDGsのみならずその先のBeyond SDGsの根幹となる文化芸術を、日本から世界へ発信していく「日本国際芸術祭」を推進していく。京都で開催するラウンドテーブルや文化芸術の取組が大阪・関西万博の機運醸成と、関西のみならず国内外の産学公の多様な共創を導き、いのち輝く未来に向けて貢献出来れば幸いである。

